



なかつたことでしょう。生き物たちは、動物の世界に存在しています。それぞれ自由に生き、躍動しています。生きていくために、ほかの動物を食べたりもする。それは動物の世界の秩序であって、人間の道徳でどうこう言うことはできません。人間の手本にも、教訓にもできません。ヨブは自分の苦況について、社会から弾き出され、ジャッカルや駝鳥の仲間になってしまった、と嘆きました。人間は人間の世界に生き、そのルールに従うものですから、そこから出たら人間として、人間らしく生きていくことはできません。

神さまにとつては、これらの生き物はいずれも、御自身でお創りになり、慈しんで守ってこられた、大事な被造物です。それらがどうやってこどもを産み、どんなところに住んで、何を食べるのか。なぜそうなのか。神さまはみんな知っておられます。それらは、神さまがお与えになったからです。これらの生き物が生きて、死に、子孫を増やしていく。すべて神さまの御手の中に、祝福のうちにあります。創られたものは、「極めて良かった」。神さまは何もかも喜んでおられ、愛しておられるのです。神さまは被造物全体を肯定されました。ヨブが否定したかった創造の御業を、神さまは力強く、肯定されます。

人間はこの世界の管理を、神さまから委ねられました。その中には、ほかの生き物たちも生きています。自分の知恵に頼り、自分の利益のために、地上にあるさまざまなもの、自分たちのために用います。そうして人間は社

会を造り、国を造り、文明を発達させてきました。世界のことを知りたいと思ひ、科学や哲学を發展させました。自然界の謎を少しずつ解き明かしてき

ました。いまでは、遠い宇宙のことや、地球の奥底のこと、人間やほかの生き物の身体の仕組み、病気がなぜ起こるか、どう治すか、などということについての知識を、わたしたちはある程度まで貯ええました。人間の活動が、地球全体の気候に悪影響を及ぼすようなことさえ起こっています。忘れがちなことですが、この世界にあるものはもちろん、何もかも神さまがお創りになったものであり、神さまのものです。

わたしたちは主人であるかのように、横暴に振舞いますが、実は管理人を任されているだけに過ぎません。人間はその一員として、世界の中に生きている、そこで生かされているのです。解き明かせない謎が、たくさんあります。知識に限界があることにおいて、古代の人々と現代のわたしたちは、たいてい変わるところがありません。そして、人間は神さまを知りたいと思ひます。神さまが御自身をあらわそうとなさなければ、わたしたちは神さまを知ることができません。

ようやく沈黙を破られた神さまは、いったいなぜ、創造についての問いをヨブに立て続けにぶつけられるのでしょうか。ヨブには答えようもない、知りようもないことばかりです。何もわからぬにもかかわらず、神さまに對して大口を叩いてきたヨブに、その愚かさを悟らせ、ちっぽけな人間ごときが生意気なことを言う資格はないの

だから黙るがいい、ということなのでしょうか。そうではありません。ヨブが抗議したこと自体は、神さまはお咎めにならないのです。ヨブと神さまの間の信頼関係は、壊れてはいませんが、自然の世界は、人間のために造られていてはなりません。ヨブひとりの都合で、創造は取り消されたりするようなものではありません。ヨブの考える義しさはあくまでも人間の義しさで、それで神さまをはかろうとしていたのです。神さまの義しさは、人間の義しさとは違う、もっと大きいものです。人間は被造物の一つであり、世界の一部ですが、世界は人間のために創られているわけではないからです。人間の小さな判断基準で、神さまを判断することなどできないからです。自分の苦難にとらわれて近視眼的になり、人間中心の見方しかできなくなっているヨブを、神さまは連れ出され、もつと広い所に立たせてくださいました。ヨブの苦しみは、神さまが沈黙しておられること、神さまから見捨てられ、自分の人生が無意味になったと感じることからきていました。いま神さまは彼に伝えてくださいました。彼の期待した答えではありませんでしたが、彼ひとりに、思いがけない仕方、真剣に伝えてくださった。一被造物であり、塵から創られ塵に還る人間ヨブに、神さまが正面から向き合ってくださいました。神さまはヨブを無視してはおられず、その正義は失われてはおらず、神さまの御支配は被造物の世界に確かに広がっている。そこには不条理も不運も存在するけれども、すべてのもの

は神さまの御配慮にたく支えられている。まさにこの御方こそ、天地万物を創られた方であり、その御方は御自分の創られたひとりの人間に、人格的に向き合ってくださいます。そのような御方を、わたしたちは主と呼ぶことが許されているのです。